

要 旨

本研究では、中学1年生の均一割一斉指導における単元のまとめの時間に、到達度によって再編成した少人数クラスを、更に個に応じた学習スタイル別に小グループに分け、基本語彙や基本文といった英語の基礎学力を習得させ、それを使う場を設定することにより、表現力を高めていく研究を行った。その結果、小グループに分かれて自分に合った方法で暗唱・暗写に取り組みさせることにより基礎学力の習得が容易にできること、タスク活動などの習得した基礎・基本を使用する活動を定期的に指導過程に取り入れることにより表現力の基礎を培えることが分かった。

キーワード 到達度 学習スタイル別小グループ 表現力 暗唱・暗写
タスク活動 基礎・基本 完全習得学習

1 研究の目標

英語で表現するために必要な基礎学力の完全習得を、暗唱・暗写によって目指す、効果的な少人数指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

中学校英語科では、実践的コミュニケーション能力の基礎を培うことが求められている。実践的コミュニケーション能力とは、「単に外国語の文法規則や語彙などについての知識をもっているというだけではなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力のことである」⁽¹⁾と学習指導要領に述べられている。この実践的コミュニケーション能力を育成するためには、英語で表現するための基礎学力を定着させることに加えて、それを使う活動を指導過程に取り入れることが重要であると考えられる。

平成16年度佐賀県小・中学校学習状況調査では、「聞くこと」と「読むこと」の無解答率はそれぞれ0.3%、1.0%であったが、「書くこと」の無解答率は8.2%と高かった。これは、基礎・基本をなす言語の知識不足と、その知識を使って自分の考えを表現するための力不足のためではないかと推測される。

そこで、本研究では、コミュニケーション能力の基礎を培うために、均一割一斉指導でB基準に到達しなかった生徒に対し、一人一人の学習スタイルに応じた小グループで基本文の暗唱・暗写をさせ、自分の考えを表現する基礎となる語彙や語順を完全習得させる効果的な少人数指導を探りたいと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

中学1年生の英語の学習指導において、単元のまとめの時間に、生徒の到達度によってクラスを再編成し、B基準に到達しなかった生徒に対し、一人一人の学習スタイルに応じた小グループで、基本文の暗唱・暗写による完全習得学習を行えば、習得した語彙や語順を用いて、自分の考えを意欲的に表現するための基礎を培うことができるようになるであろう。

4 研究の内容と方法

- (1) 少人数指導における完全習得学習について、文献や資料を基に理論研究を行う。
- (2) 表現力の基礎となる語彙や語順を定着させるための教材研究を行う。

- (3) 学習指導案の作成及び授業による検証を行う（第1学年 Unit 7, 8, 9）。
- (4) 研究の成果と課題をまとめる。

5 研究の実際

(1) 文献による理論研究

外国語（英語）科では、実践的コミュニケーション能力の基礎を培うことを目標の1つとしている。英語で生き生きと表現する力を身に付けるためには、意味が理解できる英文や基本的な語彙、語順をインプットし、アウトプットへとつなぐ活動を組むことが必要である。また、指導方法の工夫改善による教育効果に関する比較調査研究（第二次・最終報告書）の中学校第2学年英語調査において、完全習得学習は、学力テストの点数の底上げ効果がみられ、かつ全体的に点数が高く、より多くの子どもの興味・関心・意欲や学習態度を育てるという点で最もよい授業のタイプであるとしている。また、少人数授業の中で一人一人の進捗状況を確認しながら確実に基礎・基本を習得させる手立てを取り、表現の基礎を培うことについて、荒木秀二は「・生徒一人一人に対するきめ細かな指導が充実できる。・基礎・基本の定着が図りやすくなる。・コミュニケーションの機会を増やすことができる。」⁽²⁾と述べている。このことから、少人数授業では、一人一人の定着度を確認することや、間違いを指摘しその場で正しい表現を身に付けさせることが可能になるので、基本文や基本語彙等を定着させる活動を行うことは非常に有効であると考えられる。

そこで、一人一人の到達度や学習スタイルに応じたきめ細かな指導方法として、均一割一斉指導でB基準に達しなかった生徒に対して、基本語彙や基本文の暗唱・暗写活動による完全習得学習を行えば、効果的に表現力の基礎を培うことができると考える。

(2) 授業実践

ア 集団の再編成と「じっくりコース」

授業実践は、New Horizon English Course 1のUnit 7, 8, 9のまとめの時間において、通常の授業で行っている均一割一斉指導を到達度別に再編成した「じっくりコース」において実施した（図1）。コース編成は、各単元の終了時に行った確認テストの結果、生徒の希望、教師との面接、を参考にその都度行った（図2）。

図1に示すように、到達度に基づいて再編成した「じっくりコース」で、小グループの活動において暗唱・暗写による基礎学力の完全習得（ ），ペア学習において完全習得したものをを用いたタスク活動における表現力の高まり（ ），の2つを検証の視点として、授業を3回行った。3時間とも、基本語彙の復習を行った後、基本文の暗唱、基本文の暗写、タスク活動、まとめを指導過程に取り入れた。

「じっくりコース」では、一人一人の学習スタイルに応じた方法で集団をより細分化して学習に取り組んだ方が、一層効果があるのではないかと考え、暗唱・暗写活動は個に応じた学習スタイル別の小グループ、タスク活動はその小グループを更にペアに分割して行うこととした。

暗唱・暗写活動における小グループの編成は、事前に行った「暗唱・暗写をする時、どのような方法で覚えますか」という質問への回答（次頁表1）、教師から見た友人関係や個人の特性を参考にその都度行った。基本的なグループ編成は教師側で決定しておいたが、個別面接の際、暗

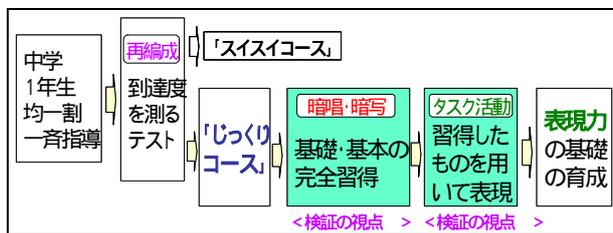


図1 全体構想

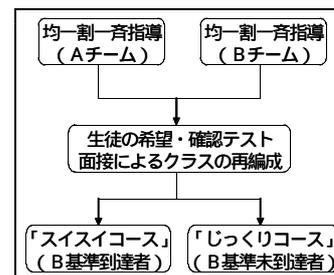


図2 研究の流れ

唱・暗写の学習スタイルがその生徒が取り組んでいた方法以外にもあるのではないかとアドバイスをした結果、授業実践ではそれまでと違う方法で取り組む生徒が出てきた(表2)。生徒には「他の方法が覚えやすいと思ったら自由に移動してよい」ことを

表1 振り返りカード(Unit9)

暗唱の方法	事前	決定	暗写の方法	事前	決定
ア 読む	14名	8名	ア 書く	15名	8名
イ 聞く	2名	4名	イ 聞く	0名	4名
ウ カード	0名	4名	ウ カード	0名	4名
エ リズム	0名	0名	エ 絵	0名	0名
オ その他	0名	0名	オ その他	1名	0名

伝えていたが、3回の授業とも途中で移動した生徒はいなかった。後述するが、この暗唱・暗写及びタスク活動においてどの生徒もB基準に達することができた。

タスク活動におけるペア編成は、上記の小グループをペアに分割するようにしていたので、活動もスムーズにできていた。

表2 Unit9における小グループ編成とテスト結果例

抽出生徒	授業前のテスト	希望	面接	本人のスタイル	決定コース	決定スタイル	授業後のテスト
A	1/10点	じっくり	した	読む・書く	じっくり	カード・カード	9/10点
B	2/10点	じっくり	した	聞く・書く	じっくり	聞く・聞く	6/10点
C	0/10点	じっくり	していない	読む・書く	じっくり	読む・書く	5/10点

イ グループリーダー(以下、GLと表記)とTTの導入

授業を表3のように実施した。2回目の授業では、1回目の授業でB基準に達した生徒4名をそれぞれの小グループにGLとしておき、グループ活動の活性化を図った。GLが活動をリードし学習方法を教えたり、覚え方についてのアドバイスをする場面が見られ、活動自体がスムーズに流れた。3回目の授業では、更にALTとのTT授業を導入し、生徒の活動量を確保しようと試みたところ、特にタスク活動において生徒の活動量の増加が見られた。

表3 授業の概要

	希望者数	実際の人数	備考
授業(1回目) (Unit7) H17 12/6	21名	12名	
授業(2回目) (Unit8) H18 1/6	26名	16名 スイスイ じっくり4名	・GL
授業(3回目) (Unit9) H18 1/31	25名	16名 スイスイ じっくり2名 じっくり スイスイ2名	・GL ・TT (ALT)

3回目の授業では、更にALTとのTT授業を導入し、生徒の活動量を確保しようと試みたところ、特にタスク活動において生徒の活動量の増加が見られた。

ウ 暗唱・暗写による基礎・基本の完全習得

(ア) スタイル別小グループについて

暗唱による表現力の基礎となる語彙や語順の完全習得では、「読む」(写真1)、「聞く」(写真2)、「単語レベルのカードを並べ替え英文をつくる」(写真3)という3つの学習スタイルにクラスを分けた。特に、「聞く」グループではALTの協力を得て基本文を録音したテープを使用した。



写真1 読む



写真2 聞く

暗写による語彙や語順の完全習得では、「書く」、「絵や模型を使う」、「単語レベルのカードを並べ替え英文をつくる」という3つの学習スタイルにクラスを分けた。「絵や模型を使う」グループは、ビジュアル的なものを暗写活動につなぐことが困難だったため、3回目の授業ではディクテーションに変更した。



写真3 カード

(イ) 言語材料について

授業を行うに当たり、各Unitごとに教科書に出てくる基本的な表現から対話を5つ(10文)用意した(表4)。暗唱活動においては、基本文を含む3つの対話文(6文)、暗写活動においては基本文である2つの対話文(4文)の完全習得を目指した。そして、それをB基準の到達目標と定めた。また、暗写活動のためのワークシートとして、1つの対話に対して空欄の数が3段階に分かれたものを準備し、到達度に応じて自ら選択し練習できるようにした。

表4 Unit9の対話文

What are they doing? They are playing baseball. Be careful. OK.
Don't drive fast. All right.
Are you reading a book? No, I am not.
Is Ken listening to music? Yes, he is.

(ウ) 結果

個に応じた学習スタイル別の小グループでの暗唱活動は、全員がB基準に達することができたため(図3)、有効であったと考えられる。続いて行った暗写活動では、1回目の授業ではB基準に達しなかった生徒が5名いた。その5名の生徒について学習スタイル別に見ると「書く」が2名、「絵や模型を使う」が2名、「単語レベルのカードを並べ替え英文をつくる」が1名であった。この5名の生徒たちの学習スタイルが本当に自分に合った方法だったのかについても、探る必要があると思われた。そこで、2、3回目の授業では、この生徒たちの学習スタイルを変更して取り組ませたところ、全員がB基準に達することができた(図4)。自分に合った学習スタイルで取り組む暗写活動は有効であったと考えられる。

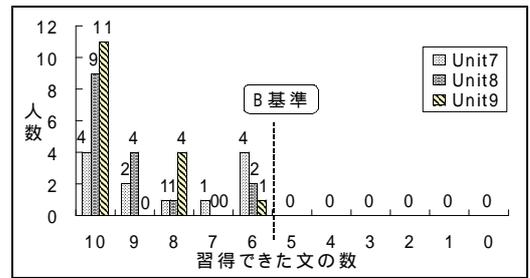


図3 暗唱活動の結果

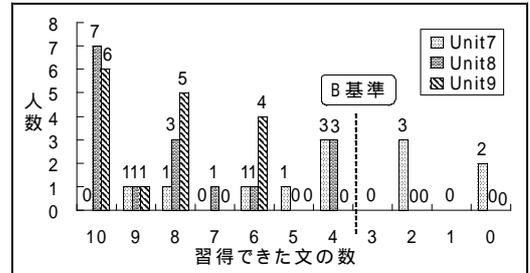


図4 暗写活動の結果

エ タスク活動によって見取る表現力の高まり

暗唱・暗写で習得した知識を使用場面に応じて使うタスク活動に取り組ませた。ペアで会話文を考えて、ワークシートに記入させ、それを基に教師の前で実際に会話をするようにした(写真4)。表5に示すように、学習した対話文を基に5つのタスクを準備し、教科書のキーセンテンスを正しく使用して、各Unitのタスク活動の2つをクリアできればB基準に到達すると定めた。その結果、全員B基準に達することができた(図5)。これは暗唱したものが確実に理解され、使用場面に応じて使えるようになったためと考えられる。また、3回目の授業ではALTとのTT授業を導入したことにより、一人当たりのタスク解決数が1、2回目の授業に比べて増加した(図6)。このことから、タスク活動を行う際、ALTとのTTを導入すれば、基礎・基本の知識を使いこなすための活動量を増すことができ、表現力の育成につなげることができると思われる。

表5 Unit 9のタスク活動

友達同士の会話です。公園で複数の人が何かしていますが、遠くて何をしているのかよく分かりません。友達に尋ねてください。友達は答えてください。
廊下での出来事です。友達とふざけていた生徒が先生にぶつかりそうになりました。そこで先生は一言言ってください。生徒はそれに答えてください。
あなたは警察官です。スピード違反の車を見付けました。運転している人に一言注意してください。運転している人は答えてください。
のび太君の家での会話です。遊びに行っているはずののび太君が部屋で本を読んでいた。お母さんはのび太君に一言言ってください。のび太君は答えてください。
教室での会話です。あなたが教室に入っていると、角の方で健がヘッドホンを付けています。近くにいる友達に健のしていることについて尋ねてください。友達は答えてください。



写真4 タスク活動

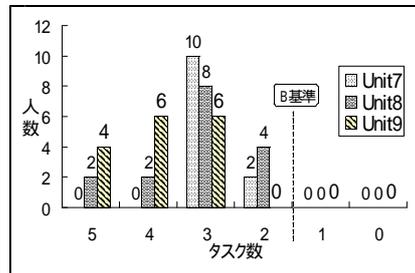


図5 タスク活動の結果

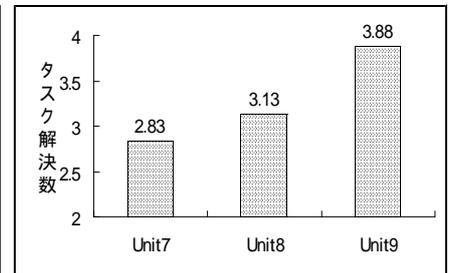


図6 一人当たりのタスク解決数

オ 生徒の変容

(7) 誤答傾向から

Unit 6, 7, 8, 9の各単元終了後に小テストを行った(次頁表6)。この授業を実践する前に学習したUnit 6の小テストにおいては、無解答や語順ミス、文法ミスなどの誤答が圧倒的に多かったが、Unit 7, 8, 9ではそれらのミスが減少している。また、綴りや符号、大文字・小文

字ミスも回を重ねるごとに減りつつあり、授業を重ねるごとにミスが減少し、記述に関する正確さが増していることが分かった(図7, 図8)。このことから、暗唱・暗写活動は、継続することにより、言語活動の内容・領域のうちの「言語に関する決まりに注意して正しく書く」ことにも効果があると考えられる。

(1) アンケートから

3回の授業実践終了時に実施した自己評価カードの「この授業を受ける前より、英語で表現できるようになりましたか」という質問に対して、全員が「とても」又は「だいたいできるようになった」と回答している。このことから、定着が不十分だった言語知識を暗唱・暗写によって正確に覚えたり、タスク活動でその知識を使うことを繰り返したりする中で、生徒が自信をもって表現活動に取り組み始めている様子が分かる(図9)。

「この授業で勉強したことによって、どんな力が身に付いたと思うか」という質問に対しては、75%以上の生徒が「英語が読めるようになった」、62%以上の生徒が「英語」又は「単語が書けるようになった」と回答している結果からも(図10)、自分に合った方法で暗唱・暗写に取り組めば、英語の基礎学力である基本文や基本語彙を習得できることを生徒自身が実感していることが分かる。

自由記述の感想からも、どうすれば英語の力が身に付くのが分かり、今後も意欲的に学習に取り組みたいという生徒の思いが見て取れる(表7)。今回は3時間の授業での取組だったが年間を通して継続的に実施することにより、表現するために必要な基礎学力が確実に身に付くと思われる。

「暗唱・暗写、タスク活動は英語の学習に役に立ったか」という質問に対し、全員が「役に立った」と回答していた。更に「どの活動が役に立つと思うか(複数回答可)」という質問に対しては、ほぼ等しい割合でそれぞれの活動が英語を習得する上で役に立つと回答している(次頁図11)。また、「英語について分かったことは何か(複数回答可)」という質問に対し、「英語の覚え方」が分かったという生徒が18名中17名だった。更に、語順、言語知識の応用、英文表記上の注意が分かったと回答している生徒もいた(次頁図12)。

これらの結果から、個に応じた方法で暗唱・暗写に取り組み、基礎・基本を完全習得させること

表6 単元末小テスト(Unit 9)

1 次の単語を並べ替えて、英文にしましょう。
 (1) (fast / drive / don't / .)
 「速く運転してはいけません」
 (2) (a book / are / reading / you / ?)
 「あなたは本を読んでいますか。」
 (3) (to / music / listening / Ken / is / ?)
 「健は音楽を聴いていますか。」
 2 次の日本語を英文に直しましょう。
 (1) 彼らは何をしていますか。 - 野球をしています。
 (2) 気をつけなさい。 - はい。

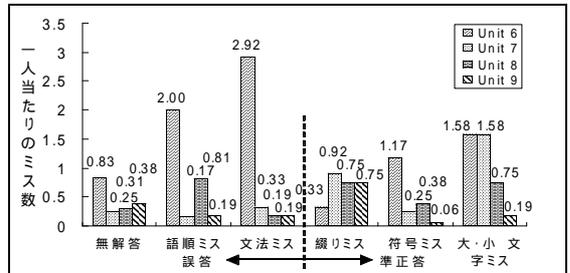


図7 単元末小テストのミスの傾向

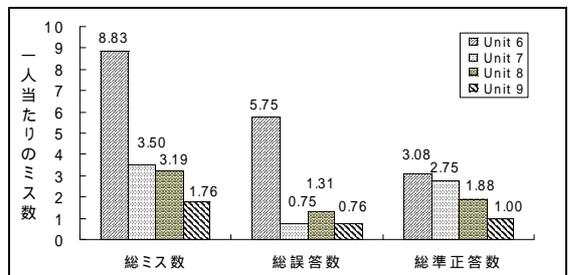


図8 単元末小テストのミスの総数

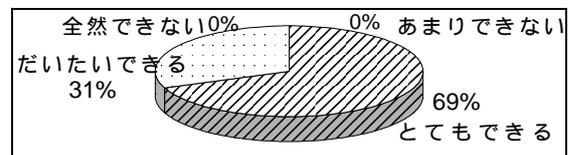


図9 以前より表現できるようになったか

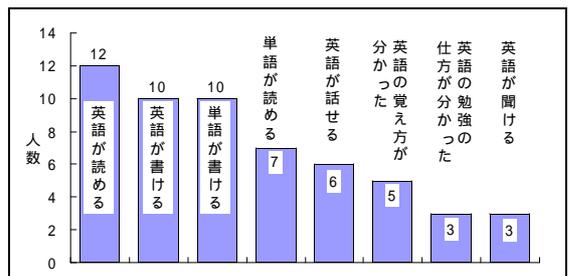


図10 どんな力が身に付いたか

表7 授業後の感想

- ・ すごく分かりやすかったです。いつも、何度書いても覚えなかった英文でも、この1時間で覚えられました。
- ・ 前よりも英語が話せるようになったから、嬉しかった。またこの授業をやって欲しい。
- ・ カードを使って勉強して楽しかったです。カードを使っての授業を、また受けたいです。

と、タスク活動において習得した知識を使うことにより表現力の高まりを見る方法とを組み合わせた指導方法は、生徒自身が、その効果を実感しやすく有効な手立てであると考えられる。

(ウ) GLに関して

グループ活動の活性化をねらって、2回目の授業から各グループにGLを1名ずつおいた。この4名の生徒たちは、今回の授業で活躍の場を得たことを肯定的に受け止め、進んで学習に取り組んでいた(表8)。その結果、どのGLにも単元末小テストにおいて点数の伸びが見られた。このことからGLが主体的に学習に臨み、定着度が上がった様子が見取れる(図13)。また、「分からないところをGLに気軽に聞いて良かった」というGL以外の生徒の声もあることから、この取組を深めていくことで助け合い学習に発展させ、ペアやグループといった集団の学習意欲を高めることへの可能性が見えてきた。

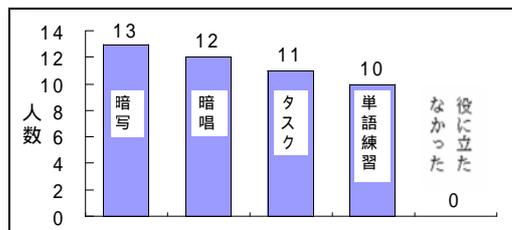


図11 どの活動が役に立ったか

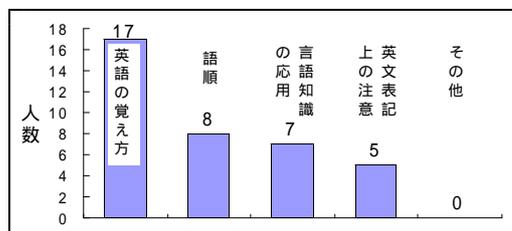


図12 英語について分かったこと

表8 GLとしての感想

- ・一生懸命覚えようと努力した。
- ・頑張って役に立とうと思った。
- ・みんなにちゃんと指示できた。
- ・みんなが進んで取り組んでくれた。

6 研究のまとめと今後の課題

生徒の到達度によってクラスを再編成し、生徒一人一人の学習スタイルに応じた小グループで暗唱・暗写に取り組めば、英語で表現するために必要な基礎学力を効果的に習得させることができることが分かった。また、暗唱・暗写活動とタスク活動を組み合わせて表現力の基礎を育成するという手立ては、生徒にとっては、そのプロセスが分かりやすく容易に取り組むことができ、教師にとっても、単元の指導計画の中に取り入れやすいということが分かった。これらのことから、単元末に生徒の到達度に応じて少人数授業を展開することは効果的な方法であることが分かった。

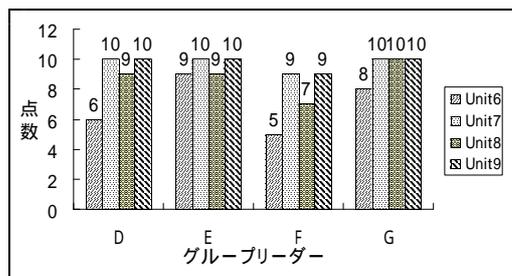


図13 単元末小テスト

今後は、少人数授業の中で生徒一人一人の学習スタイルに応じた適切なアドバイスをするためにも、個人のデータファイルを作成していきたい。更に効果を高めるためには、年間指導計画の中にこの指導形態を明確に位置付け、繰り返し実施することが必要である。また、タスクやスピーチなど、積み上げた知識を使用して、自分の意見や考えを伝える活動の場の設定を指導過程に組み入れることも今後の課題である。

《引用文献》

- (1) 文部省 『中学校学習指導要領解説 外国語編』 平成10年 東京書籍 p.7
- (2) 荒木 秀二編 『中学校英語科 少人数指導の効果的展開プラン』 2003年 明治図書 p.32

《参考文献》

- ・ 国立教育政策研究所 『指導方法の工夫改善による教育効果に関する比較調査研究(第二次・最終報告書)』
<http://www.nier.go.jp/homepage/kyoutsuu/index.html> (2006/3/8)
- ・ 田中 武夫・田中 知聡 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』 2003年 大修館書店
- ・ 斎藤 栄二 『基礎学力をつける英語の授業』 2005年 三省堂